

継続する痕跡

桑畑 洋一郎（山口大学人文学部）

山口大学吉田キャンパスの、人文学部と経済学部の間、下図で言えば「12」と「16」の建物の間にある小径に、ある石碑が建立されている。



図1 キャンパスマップ

(https://www.yamaguchi-u.ac.jp/info/campus_map/yoshida_campus/index.htmlより筆者作成)

実際に石碑を撮影したものが以下の図である。



图2 石碑
(2025年4月25日笔者摄影)



图3 石碑
(2025年4月25日笔者摄影)

この石碑は、山口高等商業学校の第4代好調である鷲尾健治の碑であるらしく、平成20年（2008年）に現在の場所に設置されたものらしい。石碑の碑文も掲載しておきたい。



図4 石碑の説明
(2025年4月25日筆者撮影)

さて今回、この「継続する過去と未来」というプロジェクトにおけるエッセイで、この石碑を題材としたのは理由がある。それは、上掲図3にも少し写っているとおり、過去から現在に至るまで継続されてきており、かつ未来にも継続されていくであろう、不思議な事象がこの石碑をめぐって生じているからである。

不思議な事象とは、この石碑の台座部分に、まるで供えられているかのように小銭が置かれていることを指す。台座部分のみ撮影した画像を以下に掲載する。



図5 石碑の台座に備えられている小銭

(2025年4月25日筆者撮影。ただし4月30日現在は小銭が整列させられている)

もちろん、小銭が置かれている趣旨は（おそらく）筆者にも理解できる。例えば街角に建立されている、いわれもよく知らない地蔵の足下に、賽銭箱もないのに小銭が置かれている光景はしばしば目にする。あるいは、水源地や池のような、澄んだ水の底に小銭が沈んでいる光景を目にすることもある。明確な信仰の対象でなくとも、何か神聖さを感じさせるものに対して、小銭を供える行為は、比較的一般的なものである。また、小銭を供えるという行為には、貨幣が象徴する我々の欲を神聖なものによって清めてほしいという思いや、純粹に神聖なものへの敬意を示すといった意味が込められていると思われる。そのような、神聖なものに近いに小銭が置かれるという事象と、その事象が持つ（あるいはその事象を起こした人が込めていた）意味は、筆者にも理解できる。

ではこの、鷺尾健治の碑に、小銭が供えられていることが、なぜ筆者にとって不思議な事象として映るのか。それはこの碑から、地蔵や澄んだ水と同様の神聖さを感じ取れない点にあるのであろう。

もちろん、鷺尾健治という人物に対して、（当然直接面識はないが）敬意がないわけではない。が、かといって小銭が供えられる神聖さをまとう人物なのかと言われるとよく分からない。また、この石碑も、『山口大学の来た道5』には

山口高等商業学校第4代鷺尾健治校長のブロンズ製胸像が載せられていたが、戦時中に供出され台座のみが残された。平成20年の東亜経済研究所の竣工に際し、台座正面に鷺尾校長のレリーフと、台座に萩ガラスを用いて山口高商の旧講堂の尖塔を模した照明器具を設置した。（64頁）

とあるように、それなりに歴史的背景のあるものではあるが、小銭が供えられる神聖さの源である根拠はやはりよく分からない。そもそもこの石碑が、現在の形となったのは平成 20 年（2008 年）のことであり、現状の石碑そのものに、神聖さの源となりうることもある歴史的な古さがあるわけでもなさそうである。置かれている小銭を見てみても、2025 年 4 月 30 日現在で小銭の総額は 283 円であり、最も古いものが昭和 43 年（1968 年）製造、一番新しいもので平成 31 年（2019 年）製造である。額から見ても、歴史的な積み重ねがそれほどあるようにも思えない。またおそらく、台座周辺の汚れ具合から見ても、ここ数年新規に小銭を供える者もいなくなっているのだろうと思われる（ただし上掲の写真を撮影した直後の 2025 年 4 月 30 日には、小銭がきれいに並べられていた。2025 年 4 月 21 日～28 日の期間、筆者は複数の授業でこの小銭に言及したので、関心を持った受講生がいたのかもしれない）。その点からも、筆者にはやはり神聖さの内実が読み取れない。

以上のように、小銭が供えられていることによって感じ取られる、誰かが何かの神聖さを見出したのであろう痕跡のみが現在残っていて、少なくとも筆者のような当事者でもない新参者には、この小銭が指し示す神聖さが何で、それを見出したのが誰なのか、さっぱり理解できない状況になっている。

ここまで「分からない」と繰り返し書いてきたが、それでも一方で、この痕跡が筆者のような非当事者の新参者にも分からせてくれるものもある。それは、この石碑が、誰かにとっての何かの神聖さをまとう、重要なものなのであろうということである。「分からない」の繰り返しと同様、ここまで筆者は、小銭が「供えられている」と表現してきた。つまり、「落とされている」でも「捨てられている」でもない。これらの小銭は、それが「供えられている」と表現するのにふさわしい場に、それにふさわしい仕方では置かれていることを読み取れる痕跡として機能しているわけである。つまり、神聖さの中身やその背景はさっぱり分からないが、何かの神聖さが誰かにとっては存在したのであろうこと（「供えられている」と見るのが妥当なこと）を、この小銭は伝えてくれている。

このような、そこで誰かが何かをしてきたのであろうことを過去から伝えてくれ、かつそこで誰かが何かをしてきたのであろうことを未来に伝えてくれる痕跡は、今回取り上げた石碑に限らず、実は身の周りに多く存在する。行為自体はもはや行われなくなっているとしても、そこで誰かが何かを行ってきた痕跡自体は過去から現在へ、現在から未来へと継続されていく。普段は目を向けることもさほどなく、ゆえに気づかないことも多いのだが、こうした痕跡を通して、我々の行為とそれによって成り立ってきた社会と、さらにはそれらが過去—現在—未来と継続されてきた／されていくことを認識することが可能となる。

このエッセイで取り上げた、鷺尾健治の碑の周辺に置かれている小銭の意味自体は分からないままではあるが、身の周りに多く存在する種々の痕跡が何かの意味を有してい

る（かもしれない）ことと、そうした痕跡に目を向けることの面白さを、小銭は示してくれている。

注 なお本稿は、秋谷直矩氏のブログの、とりわけ
<https://nakiya.hatenadiary.jp/entry/2019/07/19/172650> における指摘に大きな示唆を得たものである。